

山村の集い

—ウィトゲンシュタイン・シンポジウム 完—

井原奉明

いかにも古書店主といった風情のおじさんは、客が入ってきてもチラリとそちらに目をやるだけで、勧めるでもなし話しかけるでもなし。ここからは自分だけの時間が流れる。こんな風に本を探せるのはとても贅沢だと思う。タイトルを見、著者を見、装丁を見、目次を見、索引を見、本文に目を遣る。一冊ずつ手に取り、時間をかけて見て歩く。

どのような本があるか、さっと売り場を隈なく回って当たりをつけておいたりはいしない。そんな方法は臨時書店に似合わない。まだ見届けぬ残りの本の量を遠く眺めて、「まだこんなに残っているぞ」とワクワクしながら、出合いを待つ未知の本の存在を感じ、邂逅を期待するのが醍醐味なのである（この感じ方はスピノザ的である）。学会というのは同じような興味関心を共有する人達が集まるわけだから、のんびりしては先に誰かに買われてしまう心配もあるけれども、それもまた一興、そんな時はその本と縁がなかったと割り切るようにしている。本との出合いは一期一会。本好きの人なら理屈でなく経験則として知っているだろうが、本は出合ったときに買っておかないと、後になって「あの時の本を」と探してみても手に入らず、後悔する羽目に陥ることが多い。だから、たとえすぐに読まなくても購入しておく（購入して「積読」する。結局、「積読」で終わる本もないことはない）。そんなこんなだから、ついつい予定より多く本を買ってしまうことになる（買ってしまって帰りのスーツケースが重くなり、空港で過重を指摘される）。

時間論関係の一角だけで半時間も見たらどうか、これは必読と思われた本が二冊あったので購入することにした。まだまだ全体の五分の一ぐらいしか見ていないものの、この日はここまでに。お楽しみは明日以降に取っておこう。

顧みるに、私が海外で一番落ち着く場所は書店かもしれない。思えば渡航経験に乏しかった時からそうだった。旅先では（現地に在住していても同じだが）現地の言語で用を足さなければならない場面に必ず出くわす。ある程度公的

な機関に赴いて用件をこなす時もそうだし、学会における社交的交際もそう、果ては宿泊から買い物や食事といった用事を済ます折まで、いろいろな場面でその土地の言語を使う。ところが、こちらにしてみればその土地ごとの言語で全部の用を足せるわけではなく、多少はできるといった程度の言語もある。言語の熟達度にかなり差があるので、片言がやっとなような言語であると、コミュニケーションを図る際にかんまりの緊張が伴う。相手の言うことが理解できるだろうかという不安もあるし、どのような遣り取りになるか成り行きが不明で心配が募ることもある。また、文化的差異に無知であるせいで想像だにしないことが起こり得るということもある。しかしながら、そんな中で、私の経験からいうと書店は文化差が非常に少ない場所である。ジャンル別に分かれた書架。著者別・年代別にまとめられた書籍。それぞれのコーナーで本を探す人達。これらすべてがよく似ている（雑誌、漫画、哲学書の棚の前で本を渉猟する人達、立ち読みする人達のタイプがこれまた驚くほど似ている。あ、そうそう、文字通りの立ち読みだけでなく椅子に座って読んでいる人も多いが）。いわゆる想定外のことが起こらない安心感もあれば、何より、本に関しては知識の面で書店員に退けを取らないという自負がある由もあろう。新刊書籍販売の書店でも古本屋でも、本屋はとても落ち着く空間のひとつなのである（ちなみに、敬愛する澁澤龍彦氏もそうだったと夫人から伺ったことがある）。

二冊の本の支払いを済ませ、店番の店主に「また来るよ」の目配せをすると、先方もウインクを返してきた。本好き同士の阿吽の呼吸もまた文化差を超越していて心底楽しい。

さて、臨時書店を出ると、階段脇の廊下でタクシー運転手さんが一般向け入門書と絵葉書とを買っていた。彼も、もう一時間以上小学校で時間を使っている。「仕事はいいの？」なんて野暮なことは訊くまい。きっとタクシーの仕事だけで生計を立てているのではないだろう。



教会

碧空と白雲、煉瓦屋根と白壁のコントラストが美しい



教会

裏側に回ると年月を感じさせる

私はといえば、荷物を置いてブラブラしたいところだが、宿泊予定地が隣村のサンクト・コロナ（この地域の発音では、「ザンクト」と発音しない）に割り振られていたので、そう簡単にはチェックインできない。そう、学会参加者すべてを収容できる余裕はキルヒベルクにはなく、宿泊希望者はさらに小規模のいくつかの隣村に振り分けられるのである。山村の隣村であるからには徒歩圏ではない。朝と夜と一本ずつ、送迎用の無料シャトルバスが各村と小学校を結ぶ（これも、シャトルバスといえば聞こえは良いが、実態はバンに10人程度がぎゅうぎゅう詰めに乗り合う）。乗合バスはないし、距離や時間を考えるとタクシーに乗る気もしない。だから、夜のシャトルバス発車時刻（これが9時半）まで仕方なく荷物を持ったまま街巡りをしてみることにした。

小学校を出てメインストリートを下ってみる（どちらの方向が上りか下りかは不明であるが）。道に沿って小川が流れている。舗装路を離れ、河辺の小径を歩くことにする。溪流のせせらぎは目と耳に優しく、澄明な流れは清涼の気を運ぶ。河畔の木々は緑濃く、小鳥は葉に隠れる。何とも気持ちが良い。

少し歩いてから教区オフィスの辺りを訪ねてみた。同じ区画にある観光局には〈ウィトゲンシュタイン〉という文字が看板に掲げられている。もちろん、ルートウィヒのことだ。ここでは常設展を催しているらしい（その日は折悪しく開いていなかった）。トラッテンバッハやオッタータールは「活字上」世界的知名度を誇る村だが、その中では最も大きい町であるキルヒベルクは学会参加者を除くとどれほどの訪問客を集めているのだろうか。少なくとも夏の сезонаにウィトゲンシュタイン信奉者が大挙して〈聖地（ウィ

トゲンシュタインに関する聖地は数多くある）〉を訪ねてくるようなことはなさそうである。亡き池田晶子氏はこの辺りの諸村を訪ね、《ウィトゲンシュタインで村興し》と書いていたが、あまり効果はないのかもしれない。

さらにブラブラと歩を進める。橋がある。池がある。林がある。郵便局がある。ガストホフ（名前はホテル・ポスト）がある。パン屋、ケーキ屋がある。呑み屋がある。ビラという（オーストリアで著名な）スーパーがある。しかしこういった建物は隣接していない。ぽつぽつと建っている。そして、いろいろな場所に移動しても、遠景に教会を望むことができる。

メインストリート沿いにあるキルヒベルク最大の宿泊所はホテル・リンデである。このホテルの入り口のところに幹回り7mを超える大木が聳えている。この木は樹齢千年を超える菩提樹で、これにちなんでホテルの名前を「ホテル・1000歳のリンデ（菩提樹）」と付けているのだ。この大木は町の象徴であり、人々の連帯感や共同体帰属意識の源となっている。ホテルと言っても、まゝガストホフという感じであり、決して都会のホテルっぽくはなく、洗練されているわけではない。けれどもそれが良いのである。この町の雰囲気実によく合っている。ホテルの一階にあるレストランでは、ひと品当たりウィーンの値の8割ぐらいいで、お値打ち感も高い。メニューも充実している。アラカルトでは「地元料理」を謳っていて、シュニッツェルやパスタなどかなりの美味だ。えっ？ パスタが地元料理？ そう、前に記した通り、この辺りはアルプスの北縁だと地元の人達は信じているのである。実際の距離はかなりあるが、「この山脈を越えたらイタリア」という意識がどこか



ホテル・リンデの前で
向かって右側に大木が聳える



ホテル・リンデのシュニッツェル
味にも量にも大満足

にあるのかもしれない。

町民のアイデンティティと言えば、町の名の由来となっているウォルフガング教会も忘れてはならない。山側へ回って坂道を登り、町の名の由来となった教会へ足を運ぶ（覚えておいでだろうか、キルヒベルクは「教会の丘、教会の山」の意である）。小高い丘の上にある小さくて古い教会は幾星霜変わらぬ姿で佇んできたに違いない。凜とした威厳と格。信望。私の中で「大きなのっぽの古時計」の旋律が流れた。自然と合掌し、教会自体への祈りも捧げる。いつまでも同じ姿で。また会う日まで。

町といってもこぢんまりとしているから、小一時間も歩くうちに大体のところを見て回ることができる。再び小学校に戻って来た。学会関係者と今回のテーマについて談笑する。その後、肩から荷物を下そうと小学校前のベンチに腰かける。あぁ、あのタクシーもいなくなったな。高緯度だし、夏時間ということもあって日没の時刻は遅いけれども、山の日暮れは足が速いようだ。発表用の原稿に手を入れるうちに、辺りは暗くなっていった。早めの夕食。一日の疲れが出てくる。そんなこんなしているうちにシャトルバスの発車時刻となった。

サンクト・コ罗纳はキルヒベルクよりも更に高地にある。クネクネうねった山道をバスに揺られて登る。気温が下がるのが体感でわかる。山道沿いに民家が散見されるようになった。かれこれ 20～30 分も走っただろうか、一軒のガストホフの前で停まる。「フェルンブリック（展望）」という名であった。ここで降りるのは私を入れて 2 組。ひんやりというより、寒いぐらいである。玄関から中に入り、宿のおばさんの歓迎を受ける。レストラン（むしろ食堂という感じ）には食事をしている人が一組いた。泊まっている人かな？ おばさんが宿泊上の注意と翌朝の朝食についての

説明をしてくれる。所々ドイツ語がわからない。英語とドイツ語で尋ね返してみたが、おばさんはドイツ語しか解さず、説明も要領を得ない。これ以上の意思疎通は無理そうだったので、まぁいいか、と切り上げ、部屋へ向かう。二階はすべて宿泊用の部屋となっていた。建物の造りも、部屋の作りも、これはスキー場の民宿である。日本と同じだ。部屋の中は結構寒かった。疲れがドッと出る。シャワーを浴びて寝ることとする。シャワーはブースのみで浴槽などないが、それで十分。熱湯を浴びて身体を温めてからベッドに潜り込んだ。

翌朝、窓から外を眺める。眼下に広がる緑の自然。雲は山を巡り、霧は谷を閉ざす、まさにそのままの風景。看板に偽りなし、眺望は絶景である。外に出る。清心明暢な空気。深呼吸をすれば新鮮な気が肺腑を衝き、じわっと沁み入る。昨夜暗くてわからなかった「フェルンブリック」の建物全体を正面から見てみると、二階の窓に花を飾ってあってとても美しい。こうして私は発表への英気を養うことができたのであった。

さて、肝心の発表はどうだったのか。私の発表には 30～40 人程の聴衆が集まって下さった。もちろん、この中には例のタクシー運転手さんも含まれていた。

この発表では、大きく二つのポイントを主張した。ひとつは、「私が出合うのはすべて現実であり、可能性は私の思考の中においてしか開かれない」という主張から、現実と可能性の時間特性の差異を導いた論点。人は、根源的な現実の世界を生きながら、思考を通して可能性の世界を展開している。現実の世界が生との結びつきによって「A 系列（マクタガートの議論に基づく）」的な時間特性を付与される一方、可能性の世界は思考の特性を帯びることによって「B 系列」的な時間特性が特徴となる。これがひとつの



ガストホフ・フェルンブリック
花飾りの窓が美しい

ポイントである。

もうひとつは、「変化を語る場合、変化するところだけでなく、変化しないところもなければならない」という論点。まず、何かが変わると言う時、その何かの同一性を私たちは前提にしている。だから、同一でないものに変化を見ることはない。たとえば、A さんを子供の頃から知っているとして、成長した A さんを見て、「A さんは大きくなったなあ」と（A さんの）変化を認めるのは、子供の頃の A さんと現在の A さんという同一人物を比べるからである（子供の頃の B さんと現在の A さんを比較して変化を見出すことなどは考えられない）。この場合、変化を認識する主体の同一性も前提として要請される。同じ例を取れば、子供の頃の A さんと現在の A さんという同一人物を比較する〈私〉も同一人物（という意識を持つ人）でなければならない。これらの前提に基づいて、何が変化し、何が変化しないのか、考察を展開した。日常的に変化は「A が B になる」と語られる。その際、一見 A というものが自身と異なる B というものに変化しているように思える。しかし、本来 A はどこまでいっても A であり、B はどこまでいっても B なのではないか（道元はこの主旨で、「灰はのち、薪はさきと見取すべからず」と述べている）。私の考えでは、A は B に転化しない。それは、記号において、意味において変化しないのである。記号（とそれが持つ意味）はイデオロギカルな性格を持つから、変化を被らない。だから、記号 A が記号 B に変化することはない。対象 A は A という記号を使う限り対象 A であり、対象 A である以上対象 B ではない。だから、「A が B になる」のように語って、対象 A と対象 B との間に同一性を見出すことには注意を要する。私は、記号と対象は、カオスを言語分節した後で二次的に生み出される、相互に等価なものであると考えるので、記号 A と記号 B がイコールで結ばれない以上、対象 A と対

象 B も同一にはなり得ないと思う（ウィットゲンシュタインも『論考』でその考えを述べている）。

では「A が B になる」とはどういうことなのだろうか。私の考えでは、この文を使う多くの場合、変化の基体自体は表面に出ておらず、基体が変わる前の様相が A、変化後の様相が B なのである。基体自体は変化せず、基体の持つ性質や様相が、意識・思考に現象する時に B 特性を付与され、状態変化として把握されるのである。たとえば、基体が形而上学的な存在、本質であるとみなさざるを得ないとしても、故に本質主義にコミットすることになったとしても、それが一貫した主張であるならばその立場を取りたい、と考えた（「A が B になる」という文の中には、A が基体であって、B が変化後の様相である場合もあるだろう。その場合であっても、文の形式が表面上変更され、変化前の様相が省略されたと考えるだけで、根本的な論旨には変わりはない）。

発表は若干生硬であったと思う。それでも聴衆の方々はじっくり耳を傾け、熱心に聞いて下さった。発表後の質問も、司会者も含め、活発に展開していただけた。その質問の中でひとつだけ答えに窮したものがある。私は存じ上げなかったが、ウィットゲンシュタイン・シンポジウムにおいてその老学者は（良くない意味で）名物なのであった。彼の質問は、「現実の世界と可能性の世界の他に世界はないのか」というものだった。うむ、『論考』において、現実と可能性以外の世界が存在する余地はなく、万が一あったとしてもそれは〈語り得ない〉はずである。私がそのように返答したところ、彼の人は「いや、あなたはわかっていない。現実と可能性の世界を包み込むスピリチュアル・エーテルのような世界があって、それこそが神秘的な靈魂の…」と始めたのだ。そして、「そのようなスピリチュアル・ワールドはどう位置づけられるのだ？ 無視するのか？」と問い返してきた。参ったなあ、そんなことを言う人がいるのか。何て答えようか。宗教的な信念に触るようなことには言及したくないし…。正直、困ってしまった。「ううむ、そうですねえ、私は自分が絶対的に正しく、間違いを犯していないと言い張るほど頑固ではなく、学問的には謙虚であることを常としている者ですが、それにしてもあなたの仰ることは…、いやまあ、ひょっとしたらあなたが正しいのかもしれませんが、しかしながら今の時点で私の意見では、いや少なくともウィットゲンシュタインの『論考』の枠組みの中では、そのような話は出てきませんし、…云々、

云々。」窮状を察してくれたのであろう、司会者が助け船を出してくれて、それ以上の質問を遮ってくれた。

可能性は現実を基にして開かれるのか、それとも形而上的に存在するものなのか。このポイントについても質問が出た。実はこれは大問題であって、哲学的な立場も大きく分かれる。私は前者の考えに立つが、後者の論陣を張る人も多い。そのような視点からの質問も（当然）された。とはいえ、この手の質問は手慣れたものなのである。無限についての考え方（実無限と可能無限）を絡めて説明し、多少の応酬をして、遣り取りは落ち着いた。論戦といっても双方興奮することはない。議論を通して考えはより深められていく。

司会者がまとめてくれて、発表は無事終了。「万雷の」と言うのは大袈裟に過ぎるかもしれないが、聴衆の皆様から鳴り止まぬ拍手を頂戴した。タクシー運転手さんもウインクをしながら拍手をしてくれている。ほとんどの人が微笑みを浮かべて手を叩いてくれている。出発前の準備に協力してくれた方々への恩に少しは報いられたか、とホッとする。達成感がとても心地良い。多くの人の支えがあってこそその成功であり、念願成就が叶った。感謝。多謝。

発表のふたつめのポイントに関してはほとんど質問が出なかった。やはり消化しきれていなかったのだろう。今の私なら、もっとうまく語れたと思う（もちろん自分自身が進化かつ深化した故であるが）。当時は、実質的な同一性と差異、関係的な同一性と差異といったことを上手にまとめていなかった。また、生といった時に BIOS としての生（個別の生）しか念頭になく、ゾーエーとしての生（BIOSを生み出す根源的な生）についてはまったく思いが及ばなかった。さらに、大乘仏教にいう「無（空、真如）」や「縁起」について、当のテーマとの間に何の連関も見つけられず、その思想を取り入れて思索することがなかった。

「無」。それこそ、ゾーエーとしての生と結びつくものだと思う。「無」において、「もの」と「もの」との区別はなくなり、あらゆる「もの」の自性は消滅する。故に、何ひとつ「もの」があるとは言えず、「もの」が分化せずひとつに融合したまま「ある」という状態になっている。本来、「もの」は無自性であり、その意味で実質的な同一性を語ることはできない。一方、融通無碍である「無」は、いかなる区別もないが故にいかなる区別もつけられるという視点に立てば、存在を生み出す場、源泉となる。何「もの」で

もないが故に何「もの」にでもなり得る「無」。この点、「無」はすべての存在を胚胎した、充実した状態、源泉でもあるのだ。このような「無」こそ、あらゆる存在の根源たる、ゾーエーとしての生に他ならない。そして、（詳述はできないが）「無」が成立しないところでは時間や自己も成立せず、瞬間瞬間に意識される〈今〉や〈私〉の同一性、それを跨ぐ「もの」の同一性も、その間（〈あいだ〉または〈ま〉、むしろ〈根底〉と言うべきか）に「無」を措定して考えなければならないのである。

おっと、余滴にしては、今回内容に少し深入りし過ぎたようだ。自らの研究に関する論考は稿を改めて披露しよう。

キルヒベルクへはこの年以来赴いていない。毎年暮れには翌年のシンポジウムの案内が載った便りが届き、参加を呼びかけられているのだが。今回の余滴を機に、今年あたり再び参加し、あの人々、あの場所を再訪してみようかな、と思う。

ウィトゲンシュタイン・シンポジウムという山村の集いを自由に綴ったこの随想も今回をもって稿了とする。三回の連載となったが、その間、あたたかい励ましのお言葉を数多く頂戴した。ご愛読下さった読者の方々のご厚誼に謝意を表して、筆を擱きたい。



キルヒベルクの丘陵地帯
緑濃きのどかな風景が広がる

（いはら ともあき 英語コミュニケーション学科）